

現代オランダ社会学とエリアス学派

オランダ社会学史におけるエリアス学派の位置

市井 吉興*

近年、オランダに対して強い関心が向けられている。特にこの国が次々と展開する斬新な経済政策、社会政策上の試みは「ダッチ・モデル」とも称され、ジャーナリズムのみならず、アカデミズムにおいても脚光を浴びている。まず、経済政策の面では、「オランダ病」と呼ばれた長年にわたる経済危機と高失業率を克服したこの国の実践は、「オランダの奇跡」とも呼ばれ、あたかも今日の福祉国家再建の秘策であるかのように注目を集めている。また、社会政策の面では、「マリファナ解禁」、「同性愛や性風俗に対する寛容さ」、「安楽死の合法化」といった大胆な政策が、いささかジャーナリスティックな関心を呼んでいる。本稿の目的は、このような壮大な社会実験の背景にある戦後オランダ社会学の再編過程において「社会学」に要請された課題の検討を試みることにある。この目的を果たすうえで、本稿ではオランダ社会学の編成過程を戦前の1920年代から1940年代までを「黎明期」、戦後第一期（1950年代から1960年代）を「再編と確立の時期」、そして戦後第二期（1970年代から1980年代初頭）を「転換期」という三期にわけて検討する。なかでも、本稿はオランダ社会が劇的な変化を経験する1960年代後半から、独自の研究活動を行ったオランダ・エリアス学派の登場と台頭にオランダ社会学の「転換点」を見出す。

キーワード：社会誌学、現代社会学グループ、列柱状社会分割、ノルベルト・エリアス、オランダ・エリアス学派

目次

はじめに

1. スタインメッツとボンガー
 - オランダ社会学の礎を築いた二人
2. 「社会誌学」から「社会学」へ
 - 戦後オランダ社会学の再編
3. オランダの社会変動と社会学
 - オランダ・エリアス学派の登場

まとめにかえて

はじめに

近年、オランダに対して強い関心が寄せられている。特に「オランダ病」と呼ばれた経済危機と高失業率を克服したオランダの実践が「ダッチ・モデル」と称され、今日の福祉国家再建の秘策であるかのように注目されている¹⁾。またアカデミーにおいてもダッチ・モデルは、1980年代の「福祉国家の危機」に直面した西欧福祉国家が試みた「福祉国家体制の再編」-

* 立命館大学非常勤講師

例えば新保守主義的再編，ネオ・コーポラティズム的再編 - に対するオルターナティブとして注目を集めている²⁾。

しかし、「ダッチモデル」と称される社会実験が一応の成果を収めている要因が、どれほどまでに理解されているのだろうか。オランダに関する関心の高まりとは裏腹に、これまでのところ、そのような点にまで踏み込んだ研究はきわめて少ない。この点で、現在の「ダッチ・モデル」の成功の一因として、戦後オランダ社会学の存在とその果たしてきた役割が指摘できるのではないだろうか。19世紀中葉の黎明期以来、紆余曲折の道をたどってきたこの国の社会学の歴史は、まさにこの国の福祉国家としての激動の歴史と常に歩みをともしてきたともいえる。そして、この点からは当然、オランダ社会学が近年の「ダッチ・モデル」の展開、そしてその成功へといたる過程にも強い影響を与えていることも十分に推察しうる。

以上のような点を踏まえて、本稿では現在オランダで展開されている様々な社会実験の背景にある戦後オランダ社会学の再編過程において「社会学」に要請された課題の検討を試みる。その際、本稿はオランダ社会学の編成過程を戦前（1920年代から1940年代）を「黎明期」、戦後第一期（1950年代から1960年代）を「再編と確立の時期」、そして戦後第二期（1970年代から1980年代初頭）を「転換期」という三期にわけて検討することにしたい。なかでも、本稿はオランダ社会が劇的な変化を経験する1960年代後半から、独自の研究活動を行ったオランダ・エリアス学派の登場と台頭にオランダ社会学の「転換点」を見出すことが出来ると考える。この転換期は、オランダに伝統的に形成されていた柱状化社会の崩壊という過程を背

景としており、オランダが繰り広げる様々な新しい試みは、このようなオランダ社会の基盤構造の変動がその原因となっていると言えるであろう。このなかでオランダ社会学も大きな変化を遂げることになるのだが、なかでも戦後期に理論的モデルとした構造＝機能主義を批判的に乗り越える試みがなされたのである。そのなかでオランダ社会学はノルベルト・エリアス（Norbert Elias）の理論を受け入れ、新たな再編を試みることになったのである。以下では、まず手始めに戦後オランダ社会学の展開とエリアス社会学の関係を理解するために、オランダ社会学の歴史を第二次世界大戦以前に遡及しながら、把握していきたい。

1. スタインメッツとボンガー - オランダ社会学の礎を築いた二人 -

オランダ社会学の誕生は、オランダの産業化が劇的な展開を見せ始めた19世紀中頃にまで遡ることが出来る（Zijderfeld 1966: 119）。社会学史を紐解けばコント以来、「社会学」は産業化によって生じた「社会問題」への対応として要請されてきた学問であった。この点は当時のオランダも例外ではなく、なかでも現代オランダ社会学の前史において活躍した人々は、産業化がオランダ社会にもたらした社会問題を分析、克服することを社会学に求めたのである³⁾。その後、オランダ社会学は、デュルケム、ヴェーバー、マンハイムといったヨーロッパを代表する社会学者を受容し、独自の展開を試みるはずであった。しかし、このような試みは、1940年にオランダがナチス・ドイツに占領されることによって中断を余儀なくされてしまう。

奇しくもオランダが占領された1940年、オ

ランダ社会学の礎を築き上げたスタインメッツ（S. R. Steinmetz 1862-1940）とボンガー（W. A. Bongers 1876-1940）が、この世を去った。今日において彼らは、それぞれ現代オランダ社会学の基礎を築き上げた人物として知られている。ここではまず、彼らが戦前に構想した「社会学」を紐解くことによって、彼らが戦後のオランダ社会学にどのような課題を預けたのかを検討する⁴⁾。

まず「オランダ社会学の父」と称されるスタインメッツは、もともと法学と民族誌の専門家であった。1907年にアムステルダム大学に赴任したスタインメッツは、後に「アムステルダム学派」と呼ばれる社会調査集団を組織し、産業化によって変化するオランダ社会を統計学的なデータ群を用いて全体的に記述することを試みた。その際スタインメッツは、このような試みを「社会誌学（Sociografie）」として展開することになる。この社会誌学は、『ゲメインシャフトとゲゼルシャフト』を著したテニースが提唱した「経験社会学」との類似性を持っている。先にも述べたが、経験社会学や社会誌学は、社会を統計学的なデータ群を用いて全体的に記述することを目指している。さらに言えば、これらのアプローチは人間行為の主観的契機よりも、むしろ社会的現実を説明可能なものにする客観的法則を明らかにすることに力点を置いていた。また、社会誌学は都市研究の代表的存在であるシカゴ学派と比較され、その方法論的な相関関係も指摘されている（Becker and Leeuw 1994: 155）。しかし、社会誌学は実証研究を一面化するあまりに、「素朴実証主義」へと転落する危険性を孕んでいた（Zijderveld 1966: 122-23）。というも、スタインメッツはほとんど理論的営為を強化することに関心を向

けなかったからである。また、そればかりか、オランダの社会変動を分析する彼の観点には、「社会ダーウィニズム」が暗黙のうちに用意されてもいた（Becker and Leeuw 1994: 155）⁵⁾。とはいえ、このような理論的弱点を内包しつつも、社会誌学は戦後1950年代前半までオランダ社会学の基本課程として重要視され、アムステルダム学派から多くの社会学者を輩出することになるのである⁶⁾。

一方ボンガーは、1922年にオランダで初めて社会学教授のポストに就任し、さらに1936年には「オランダ社会学会（NSV: Nederlandse Sociologische Vereniging）」を設立し、会長を務めることになる。この学会には、スタインメッツをはじめとしてアムステルダム学派のメンバーが多数結集することになった。また、学会誌として『人間と社会（*Mensch en Maatschappij*）』を発行した。このような功績ゆえに、ボンガーはオランダ社会学の組織的基盤を確立させることに貢献したことで評価されている。しかし、その一方でボンガーが「社会学者」として積極的な評価を得ることはまれであり、むしろ「犯罪学者」として認識されてきた⁷⁾。社会学者としての認識は低かったとはいえ、ボンガーは犯罪研究を媒介にして、スタインメッツとは一線を画した社会学的営為を試みていた。

スタインメッツと同様に、ボンガーにとってもヨーロッパにおける産業資本主義化という社会変動は、重要な問題関心であった。しかし、このような社会変動を分析する際に、ボンガーはスタインメッツ型の「社会ダーウィニズム」ではなく、「マルクス主義（史的唯物論）」を分析軸の中心に据え、オランダや列強諸国の帝国主義政策に対する批判へと彼自身の問題関心を

拡大するのであった⁸⁾。確かに、一見するところ、このようなボンガーのアプローチは社会学というよりは、政治経済学に近いものとも捉えられよう。しかし、ボンガーは史的唯物論に国家と市民社会との関係を社会的に解明する可能性を見出していたのである。そのような試みは、『犯罪と経済状況』（1905）において見出すことが出来る⁹⁾。

この著作においてボンガーは、これまでの犯罪研究に対する総合的な批判を試みているが、なかでもボンガーは「犯罪」を生物学的なものとしてみ直すのではなく、むしろ社会的なものと理解することを強調している。その際、ボンガーは資本主義の進展が「国家独占資本主義」に向かっていることを理解したうえで、「社会的なもの」は、現代資本主義の支配様式によって形成されるものと考えているのである。このようなボンガーの社会的な視座は、その対象を「犯罪」に限定することなく、人間行為全般が国家と市民社会との重層的な緊張関係に巻き込まれているという実態に向けられていると理解することが出来る。このようなボンガーの視点は、エリアスの『文明化の過程』（1939）に対する書評においても貫徹されており、スタインメッツが依拠した社会ダーウィニズムに対する批判を汲み取ることが出来る¹⁰⁾。

独自の社会的営為を試みることによって、スタインメッツとボンガーはオランダ社会学の礎を築いた。彼らの問題関心は、オランダ社会学の産業化によって発生する社会問題の分析とその解決を目指すものであった。しかし、彼らの社会的営為は、その根幹ともいえる「社会変動」の理解において、両者間の大きな差を描き出していた。この差こそが、その後のオランダ社会学の展開に大きな課題として預けられ

たのである。そして、この差を克服する試みこそ、オランダ社会学が「社会誌学から社会学への転換」を追求する際の重要な課題になっていくのである。

2. 「社会誌学」から「社会学」へ - 戦後オランダ社会学の再編 -

1945年5月、ナチス・ドイツは連合国に対して無条件降伏し、第二次世界大戦は開戦から6年目にしようやく終結した。同時に、オランダも5年にわたる占領支配から解放されることになった。ナチス・ドイツの侵攻によって焦土と化したオランダは、「戦後復興」という国内課題とともに、「民族自決」、「民族解放」のもとに展開された植民地の独立運動（例えばインドネシア）など、国外問題の対応にも追われることになった。また、戦後の高等教育の再編のなかで、社会学は重要な役割を期待されることになった。ボンガーとスタインメッツ亡き後、オランダ社会学はアムステルダム学派を中心に展開し、社会誌学はオランダ社会学の基礎理論としてその影響力を持続させていた。しかしこのような状況は、1950年代初頭から変化を見せ始めることになる。

1953年にインドネシアから帰国したドーン（J. A. A. van Doorn）を中心に若手の社会学者たちが、『社会学ガイド（Sociologische Gids）』という新しい学術誌を刊行し、同時に「現代社会学（De Moderne Sociologie）」という研究集団（以下「現代社会学グループ」と称す）を組織した。このような彼らの試みは、「オランダ社会学会（NSV）」における世代交代であり、このことは「社会誌学批判」に他ならず、彼らは社会誌学に欠落していた社会理論の構築に対

する関心を高めていたのである（Doorn en Lammers, 1958）¹¹⁾。まさに彼らはナチス・ドイツの進行によって中断させられたオランダ社会学の独自の展開という試みを再生させることになったのである。その際、彼らはアメリカ社会学、なかでも「構造＝機能主義」を導きとして社会理論の構築を試みるようになった¹²⁾。

周知のように、1951年にパーソンズが著した『社会体系論』によって、構造＝機能主義はアメリカ社会学の中心理論としてだけでなく、世界各国の社会学理論にも大きな影響を与えた。しかし現代社会学グループは、構造＝機能主義を一般社会理論として社会システム論へと発展させていくパーソンズの試みから距離を取るようになる。むしろ彼らは、構造＝機能主義のなかでも「中範囲の理論」を唱えるマートンに対する関心を強めていく。このような彼らの企図には、社会誌学の「良き伝統」である実証研究を継承する試みであると推測出来る。しかし、それ以上に彼らは構造＝機能主義を実証研究と理論研究の統合モデルと位置づけ、「真の社会学」の構築を目指したのであった（Haan 1994: 99）。まさにこの試みこそが「社会誌学から社会学への転換」に他ならない。

このような転換は、ドーンとラマーズ（C. J. Lammers）による『現代社会学』（1959）の発表によって、より決定的なものになる。このテキストは、現代社会学グループの創意を結集し、社会理論に一面化することなく、経験実証研究の枠組みを準備することを志向していた（Zijderfeld 1966: 127）。したがって、このテキストは、現代社会学グループの理論研究や調査研究の指針として、また学部学生の教科書として積極的に利用された。このことはハーンが指摘するように、現代社会学グループはアメリカ

社会学を導入し、オランダ社会学を「アメリカ化」することになったのである（Haan 1994: 106）¹³⁾。

現代社会学グループは、オランダ社会学のアメリカ化に貢献したといえよう。同時に、現代社会学グループはより実践的な方向へと歩み出すことになる。それは、社会学の役割を戦後オランダ社会における福祉国家政策推進のために活用することである（Haan 1994: 99）。このような企図は、ハーンが引用しているように、「現代社会学グループは、調査結果を社会問題に適應させることを望んでいるのと同時に、社会学者の社会的役割を福祉国家における社会エンジニアと理解していた」というドーンのコメントに十分に表明されている（Haan 1994: 100）。したがって、現代社会学グループの研究は、社会調査を中心に位置づけ、オランダ社会を特徴づけていた柱状化社会、地域社会、労働問題、医療問題、宗教問題といった様々な領域を扱い、大きな成果を収めていくことになった（Haan 1994: 100）。なかでも、「柱状化社会」はオランダ社会の秩序維持の象徴であった。「柱状化社会」とは、宗教、階級、言語を基盤とした複数のサブ・カルチャーに分割された多元主義社会であり、中欧四カ国（オランダ、ベルギー、スイス、オーストリア）の政治社会体制の特徴をなしている。しかし、この「柱状化社会」も戦後の高度経済成長と大衆社会的状況の到来に直面することにより、柱状化社会を支える「柱（zuil）」自体の存在意義を再検討する必要性が生じてきた。当然のことながら、社会学者たちは「柱状化社会」の分析に関わることになった。

オランダにおける社会の「柱状化」、もしくは「列柱状社会分割（verzuildheid）」という

現象は、19世紀に始まる¹⁴⁾。この背景には、宗教を基盤にしたサブ・カルチャーの形成がある。つまり、近代化にともなう伝統社会の弛緩のなかで、信者を「悪影響」から守るべく、教会が独自の信者の組織化を試みたところにその起源が見いだせるのである。この「悪影響」の第一のものが、ブルジョアジーの自由主義に由来する「反権威主義」であり、第二のものが社会主義の登場（なかでも1848年革命）による「社会主義的な労働運動の進展」であった。これらの「社会問題」に対して教会は独自の対応を迫られることになった。オランダの場合、カトリックとプロテスタントの両派が存在し、それぞれが「柱」と名づけられたサブ・カルチャーを形成したのである。オランダではそれまでの伝統的な支配勢力であったカルヴァン派が、ブルジョアジーの自由主義派とカトリック派の連携により政権を奪取された。カルヴァン派は巻き返しを計るなかで社会問題と取り組み、その過程において労働者階級も含む諸階層を自らのサブ・カルチャーに包摂し、ついには最初の大衆政党である「反革命党」を結成するに至った。これに対して、元来少数派で隷属的な地位に置かれていたカトリック派は、「自らの社会的解放」を目指して独自のサブ・カルチャーの形成を進めることになった。その後、オランダの列柱状社会分割は、カトリック派（カトリック人民党）、カルヴァン派（反革命党）、世俗自由主義（自由党）、社会主義（労働党）という4つの柱に収斂されることになる。

宗教や階級に基づいて形成されたサブ・カルチャーは、主として政党別に独立した社会集団を構成し、それはまさに「柱のごとく」並立し、列柱状社会分割すなわち縦割り社会を形成する。なお、それぞれの柱は同様の目的と機能を

持った組織や団体を内包していくことになる。例えば、メディア（新聞、放送）、学校、労働組合、スポーツ・社交団体はすべて柱ごとに分離独立し、人々はその一生をそれぞれが所属する柱のなかで完結することが可能であった。しかし、1960年代における都市化と社会移動の急速な進行や宗教に対する世俗化の波は、確実に柱の存在意義を脅かし始めており、それが顕在化するのには時間の問題であった。

現代社会グループが調査研究を中心に成果を収めていく一方で、グループの方向性 - 特に『現代社会学』に収斂された理論枠組み - に対して、グループ内部から批判が出された。例えば、後にオランダ・エリアス学派の中心人物となるハウツブロム（Johan Goudsblom）とトーエネス（Piet Thoenes）は、現代社会学グループの経験的・量的調査に対する批判を行ったが、彼らの批判には現代社会学グループが採用した構造 = 機能主義に対する理論的な抵抗が含意されていたという点は特に留意する必要がある（Haan 1994: 103）。

『社会体系論』以降、構造 = 機能主義やパーソンズに対する評価は、本国アメリカにおいても批判的な傾向を示すようになる。そのなかには、『社会学的想像力』（1959）においてミルズが、パーソンズの社会システム論を「誇大理論」として告発したセンセーショナルな批判も含まれている。しかしそれ以上に、『産業社会における階級と階級闘争』（1957）においてダーレンドルフが「闘争理論」を用いてパーソンズ批判を行ったことにより、構造 = 機能主義に対する批判が全世界的に繰り広げられた。当然のことながら、オランダ社会学界においても闘争理論の影響を受けた構造 = 機能主義批判がトゥルリングス（J. M. G. Thurlings）、ムーア（R.

A. De Moor), ホッダイン (H. P. M. Goddijn) によって行われた (Zijderveld 1966: 128-29)。

ゼイデルフェルトが指摘するように、パーソンの構造 = 機能主義もダーレンドルフの闘争理論も一面的であり、これらは社会理論として社会的リアリティを把握するうえでは不十分であった (Zijderveld 1966: 129)。そこで、パーソンズやダーレンドルフの問題構成をデュルケムやヴェーバーといった古典社会学の研究を通して理解するアプローチが試みられた。このようなアプローチは、現代社会学グループが批判した哲学的な志向性を持った社会学理論 (主にドイツ社会学) の再考を促すことにもなり、同時に、知識社会学、文化社会学、歴史社会学、現象学的社会学に対する関心を呼び起こすことにもなった¹⁵⁾。さらには、闘争理論がパーソンズ批判の拠所としたマルクスに対する関心も呼び起こされ、フランクフルト学派のような「批判理論」への接近も準備されることになる。このような新たな理論動向は、1960年代後半から現れる社会変動によって一気に加速することになる。その社会変動とは、オランダ社会の秩序維持の象徴であった「柱状化社会」に対するアンチテーゼとしての文化変容によって引き起こされたのである。

3. オランダの社会変動と「社会学」

－ オランダ・エリアス学派の登場 －

1960年代前半までにオランダ社会学は、アメリカ型構造 = 機能主義の影響のもと「社会誌学」から「社会学」への展開を完全に成し遂げた。しかし、1960年代から本格化する全世界的なパーソンズ批判は、オランダ社会学にも理論的な動揺をもたらした。なかでも、闘争理論

による「構造 = 機能主義は社会変動を説明しきれない」という批判は、同時期にオランダ社会学が直面した自国の社会変動 - 「脱柱状化 (ontzuiling)」と「多極共存型デモクラシー (consociational democracy)」の動揺 - を把握する理論的視座の構築を急がせた。その際、多くの社会学者は、オランダ社会を特徴づけていた列柱状社会分割の根本である「柱」の存在意義に対するアンチテーゼとして示された「文化変容」に関心を向けざるをえなかった¹⁶⁾。田口晃は、この脱柱状化を集団 = 組織形態の変化という観点から次の三点に特徴づけている (田口 1989: 244-245)。

田口によれば、まず第一に、従来の4つのサブ・カルチャーの外に伝統的な宗派対立やイデオロギーと無関係な様々な運動集団が発生し、彼らが異なった社会領域で異なる目的を目指しつつ「柱」を外から蚕食していったことである。第二に、これと呼応するように各「柱」内部で諸々の社会集団間の連帯が緩み、かつ上からの指導や統制が脆弱化し、それぞれの集団は他の「柱」内の同種集団との連帯を模索するようになった。こうして伝統的な列柱状社会分割は、外と内の両方から崩壊していくのである。そして、第三に、列柱崩壊以降も、規模の縮小はあったにせよ、依然として様々な社会集団が存在し、しかもそれらが「自発的結社」として活発に活動を展開する社会が登場したということである。ここで指摘した伝統的な列柱状社会分割の崩壊により、これまでの集団 = 組織が完全に消滅することになった。しかし、それ以降、「大衆社会状況」のような、諸個人が分断された社会状況が生まれたわけではなかった。つまり、脱柱状化現象は、大衆社会状況の移行でもなければ、平準化された脱イデオロギー社会の

到来を意味することでもない。むしろ、脱柱状化現象は、社会的不安定状態が生じるという危険性を孕んでいるのである。しかし、そのような危険を内在させながらも、一方で、この当時のオランダでは、明らかに個人と社会との新たな関係が模索されていたのである。そして、このような問題に対して多くの理論的アプローチが試みられるなかで、「オランダ・エリアス学派」が登場してきたのである¹⁷⁾。

エリアスの社会学理論の影響を受けたハウツプロムが、1969年にエリアスを客員教授としてオランダに招聘したことによって、オランダ社会学における「エリアス・ブーム」が到来する¹⁸⁾。折りしもエリアスがアムステルダム大学に招聘された1969年は、フランス5月革命の影響を受けたオランダの学生運動が激化する年でもあり、学生や若手研究者は社会変革の期待と同時に、それに対応する新たな理論構築を模索していた（Daalder and Shils ed. 1982: 178=1990: 203, Goudsblom 1977a: 63）。その渦中において、エリアスは「行動様式や道徳のコードの変化とそれらの変化がどのような権力関係のもとで生じたのか」（Goudsblom 1977a: 63）という論点を立て、1960年代の社会変動を誘引した「文化変容」の分析を試みたのである。このオランダ招聘によって、エリアスはヨーロッパの社会学界においてその存在をアピールしていくことになるのだが、オランダ社会学界は戦前にもエリアスに対する関心を示し、その理論的な先駆性を高く評価していた。

エリアスの『文明化の過程』は1939年、スイスの出版社によって出版された。この著作は出版部数も少なく、1930年代後半という時代状況の影響もあり、発行当初は全くといっていいほど売れなかった。それでも、この著作に対

しては、わずかながらではあるが書評が著された。そのなかにはエリアスと親交のあったボルケナウや精神分析医のフックスが含まれていた。オランダの社会学者では第一章で検討したボンガー、パウマン（P. J. Bouman）、ヴィッセ（J. Wisse）らが、そして文芸批評家ではブラーク（Menne ter Braak）が『文明化の過程』に関心を示し、書評を著した。

さて、エリアスが『文明化の過程』において構想したことは何であったか。ごく簡潔にまとめれば、エリアスのそこで構想は、「文明化過程（Prozeß der Zivilisation）」概念を用いて、中世から開始されるヨーロッパ社会の編成秩序の変化を、「個人の文明化過程（外的抑圧から自己抑制へ移行過程）」と「社会の文明化過程（国家形成過程）」とが重層的な編み合わせを構成していく過程を明らかにすることであった。このことは『文明化の過程』が、「第一巻」の「ヨーロッパ上流階層の行動様式の変遷」と「第二巻」の「社会の変遷 / 文明化の理論のための見取り図」というテーマによって構成されていることから明らかである。しかしほとんどの評者は、「第一巻」に対する積極的な評価に終始し、エリアスを「文化史家」もしくは「社会心理学者」として高く評価したのである。そのような多くの評者たちとは対照的に、ボンガーは、むしろ「第二巻」に注目し、これを「社会的に重要な位置を持つもの」と評価した（Bonger 1940: 283-4）¹⁹⁾。なかでも、ボンガーは、「国家形成過程が諸個人の精神構造にいかなる影響を与えるか」というエリアスの論点を高く評価し、この論点を心理学者だけでなく、社会学者や歴史学者も真摯に取り組むことを要請したのである（Bonger 1940: 284）²⁰⁾。このような指摘は、例えば『文明化の過程』を

構成する「第一巻」と「第二巻」には連続性はなく、むしろ「第二巻」において試みられた国家形成過程の分析は、「第一巻」において取り組まれた「文化史的・精神分析的成果を蔑ろにしてしまう」というパウマンの評価などとは対照的であった。このようにボンガーの書評は、後年のエリアス評価における重要な論点をも先取していたのである（Featherstone, 1987）。

このようなエリアスの主題は、「脱柱状化された文化変容」の分析を試みていたオランダ社会学に大きな影響を与えた。また、多くの学生たちもエリアスの講義に参加し、主著である『文明化の過程』は、「カルト的」な熱狂をもって迎えられた（Mennell 1992: 24）²¹。ハウツブロムは、若手の社会学者や院生たちとアムステルダム大学を拠点にエリアス社会学を導きに研究活動を開始し、その成果を発表する場として1973年に『アムステルダム社会学雑誌（AST: Amsterdam Sociologisch Tijdschrift）』を刊行した²²。その後、ハウツブロムはエリアスの影響を受けたイギリス、ドイツの研究者との交流を深めながら、1976年にオランダ・エリアス学派を結成し、「オランダ社会学・文化人類学学会（NSAV: Nederlandse Sociologische en Antropologische Vereniging）」での活動を展開していくことになる²³。オランダ・エリアス学派は、その学際的な特性を生かして精力的に研究活動に取り組み、様々な研究成果を発表することになる（Kranendonk, 1990）。なかでも、オランダ・エリアス学派は、脱柱状化された文化変容を分析する過程において、「個人と社会」という社会学理論が抱える二元論的思考を克服する試みをその特徴としている。その際、彼らはエリアスが提示した「フィギュレーション（Figuration）」概念に注目し、さらにそれ

を積極的に読み替えていくことになる。

フィギュレーション概念は、「個人と社会」、「マクロとミクロ」といった社会学理論における「アポリア」として君臨する「二元論」を克服する試みとして理解されている。しかし、それ以上にエリアスは、これをパーソンズの社会学システム論批判を通じて、独自の社会構想へと展開することを試みていた。その際エリアスは、フィギュレーション概念を「人間が相互に織りなす編み物」と捉え、それを構成する諸相互依存関係に現象する「権力関係」を分析することによって、従来の社会学に見られた「個人と社会」という二元論の克服を試みるのである。

つまり、この試みは、「地位＝役割関係」を基盤とした「制度化された個人主義」や、そこに見られる「個人と社会の相互浸透」を論じることで「個人と社会」の二元論を克服しようとするパーソンズの解決に対する批判である。まさに、この展開は、アルナソン（Johan Arnason）が指摘するように、社会学理論における「個人主義」に対して、エリアスは「閉じた個人（homo clausus）」から「開かれた人々（homines aperti）」への転換を志向すると同時に、「社会」に対する新しいイメージを構想する試みであった（Arnason 1987: 444）。

このような構想は、エリアス自身が文明化過程概念を構想する際、近代において構成された人間像を批判し、近代的主体に想定される理性的な思惟のもとでの絶対的な自律性という「神話」を暴露しようとした、その試みに起源を持っている。特にエリアスは、情動抑制と自己距離化の強化が「人間の内面」という表現に表象されるように、自己抑制が「我」を「他者」から、「個人」を「社会」から隔てられたものとして「自然化」される、つまり、これを比喩的

述べれば我と他者、個人と社会を隔てる「壁」を構成することとして理解されることに危機感を抱いていた。つまりこのような自然化こそが、抽象的な個人像、すなわち「閉じた人」の定立になるのである。また、このような人間像は社会的圧力に規定されるのであり、それゆえに、エリアスは彼が構想する社会学を「人々を束縛する拘束のメカニズム」の解明と位置づけ、この拘束のメカニズムの変容を文明化過程とし、その分析の対象である「行動様式」に現象する様々な形式や規範を、意識的であれ無意識的であれ、消滅させようとする動きに注目したのである。

エリアスが提示するこのような近代的人間像批判は、脱柱状化現象に現れた個人と社会の関係性の変容を理解しようとするオランダ・エリアス学派に大きな影響を与えた。特に、このような関係性の変容は、これまで社会学が論じてきた「社会化」や「制度化」に対する理解を脱構築せざるをえなくなる。つまり、このことは親子関係、男女関係、夫婦関係といった従来の固定された社会的な役割関係にとどまらない新しい関係性が出現していることにその根拠を求めることが出来る。まさに、今日「地位＝役割」関係は、社会的慣習として、または社会システムにおける社会的機能として自動的もしくは慣習的に受容されるものではなくなった。そこで、新たな関係性の構築に向けて、スワーン (Abram de Swaan) は「交渉 (negotiation)」概念を提示し、コミュニケーションの変容を説くことになる (Swaan, 1981)。また、ウオウターズ (Cas Wouters) は「脱形式化 (informalization)」概念を提示することによって、エリアスの文明化過程概念の「限界」を明らかにし、それを超克することを試みることになる

(Wouters, 1977)²⁴。

当然のことながら、文化変容が導出した脱柱状化現象はオランダの福祉国家政策に大きな影響を与えることになり、同時に福祉国家政策推進を担うものとして期待された社会学にとっても重要な課題となる。その際、「個人と社会」という社会学理論のアポリアに対してエリアスが試みた「近代的人間像批判」という視点は、これまでオランダ社会学の主流派が依拠してきた構造＝機能主義というパラダイムからの転換を十分に成し遂げることになったのである。

まとめにかえて

本稿の目的は、戦後オランダ社会学の再編過程に注目し、再編に際して社会学に要請された課題の検討を試みることであった。そこで明らかになったことは、まず戦後オランダ社会学の再編と展開は、福祉国家政策推進という観点に立った社会エンジニアリングのための学問としての存在を自己規定することにあった。特に、このような問題関心はドーンを中心にした現代社会学グループによって発揮されたものであった。また、彼らが目指したオランダ社会学の近代化という課題、つまり「社会誌学から社会学への転換」というプロジェクトは、単に理論的な営みだけでなく、社会調査といった実践的な営みのなかで成し遂げられたのである。しかし、到達点を検証する間もなく、1960年代後半から劇的なものとなった自国の社会変動である脱柱状化と社会学理論における「パラダイム・シフト」によって、オランダ社会学は再び転換期に投げ込まれたのである。この転換期の荒波から浮上してきたのが、オランダ・エリアス学派であった。

オランダ・エリアス学派の研究は、脱柱状化に見られたように「個人と社会」との関係がどのように変化し、そこから出現しようとしている新たな関係性の胎動を把握することであった。確かに、このような彼らの問題関心は、単に現代社会学グループが目指した社会エンジニアリングのための学問としての社会学を志向するものではない。むしろ、彼らはエリアスによって試みられた「近代人間像批判」を援用することによって、個人と社会の複合的な編成過程に対する歴史社会的なアプローチを現代の福祉国家編成のプロジェクトに対する批判的な視座を提供することにあつた（Swaan, 1988）。

その後、オランダ社会学は1980年代の経済不況の影響を受け、深刻な危機状態に陥ることになる。この経済危機に対してオランダ政府は財政再建を目指し、福祉や社会政策全般の見直しを迫られることになった。当然のことながら、文教予算の見直しも検討され、高等教育に対する予算削減が容赦なく行われた。その結果、社会学部の閉鎖計画が提起、実行され、最終的に1980年代末までに、9つあつた社会学部は6つにまで削減されたのである。また、閉鎖を免れた学部でも学部規模の縮小、スタッフの削減は必至の課題となった。この危機はオランダ社会学の内部に、自らの学問の存在意義やアイデンティティをかけた激論を呼び起こすこととなる（Becker and Leeuw 1994: 154）。残念ながら、本稿ではこれらの議論の詳細については触れることができなかった。この点は次回の課題としたい。

注

- 1) ダッチ・モデルは、1997年のデンバー・サミットにおいてクリントン米大統領がオランダの

福祉国家再建の経験を評価したことによって、一挙に諸外国の政治家、中央銀行の総裁、そして労働組合幹部の羨望と期待を集めたのである。なかでも、彼らが一様に注目したものは、1982年の「政労使」三者による「ワッセナー合意」において示された賃金抑制政策にある。この政策により、オランダの労働市場は正規雇用を削減し、パートタイム労働に関する制度改革を行うことによって雇用機会の増大を成し遂げた。まさにこの点は、経済不況と雇用不安に喘ぐ先進資本主義諸国にとって学ぶべきモデルとなり、日本もその「日本的な受容」を試行しつつある。日本においては、今日の雇用政策に対する有効な手段として、「ダッチ・モデル」が掲げる「賃上げなき雇用改革」、つまり「パートタイム制導入」による「ワークシェアリング」やそれに関連するNGO、NPOの積極的な参画を保障するシステムに対して、政財界、労働組合が、熱いまなざしを向けている（長坂, 2000）。

なお、これまでにオランダは「マリファナ解禁」、「同性愛や性風俗に対する寛容さ」、「安楽死の合法化」といった他国から見たら、にわかには信じがたいような大胆な社会政策を積極的に試みており、これらに対する諸外国の強い関心と同時に多くの批判も呼んできた。これらの大胆な政策上の試みはジャーナリスティックに取り上げられがちである。しかし、いずれにせよ、現在のオランダがあたかも「現代社会の実験室」といった様相を示しており、それらの実験の多くが一応の成果を見ていることも事実である。そして、そこで繰り広げられる数々の「実験」の内容と結果とは、もはや「オランダ独自のもの」という範疇を越え、そう遠くない未来には名実ともに「モデル」としての「普遍性」さえ獲得する可能性も残されている。

- 2) 「ダッチ・モデル」をいち早く紹介し、その後の議論の基盤となつたのが、ヴィッセルとヘーメライクによって著された『オランダの奇跡（A Dutch Miracle）』（1997）である。
- 3) ザイデルフェルトは、ボンガーやスタインメッツ以前にオランダに社会的な思索を試みた人物として、統計に関する著作を著したケンパ

- ー (J. de Bosch Kemper), 社会主義思想を研究したクワック (H. P. G. Quack), 法と社会との関係を論じ法社会学の基礎を築いたハマケル (H. J. Hamaker) を紹介している (Zijderveld 1966: 120)。
- 4) 以下スタインメッツとボンガーに関する論述は、ホーランダー (A. N. J. den Hollander) の論考に依拠している (Hollander, 1948)。
- 5) 社会ダーウィニズムの観点から、スタインメッツは『戦争の社会学』(1929)において戦争を「人類普遍の集団的淘汰」として捉え、その歴史的・社会学的研究を行った。ヘーリンクホイゼン (Bart. Van Heerinkhuizen) は、「第二次世界大戦以前のオランダ社会学は社会ダーウィニズムが支配的であり、マルクス主義も例外ではなかった」と指摘している (Heerinkhuizen, 2000)。しかし、ボンガーは『犯罪と経済状況』の英語版の注においてマルクスの史的唯物論を社会ダーウィニズムに対抗する有効な理論として積極的な評価を行っている (Bonger 1916: 246)。なお、ボンガーはスタインメッツの「戦争の哲学」(1908)を社会主義者によって刊行されていた雑誌において批判している。
- 6) スタインメッツのもとから、例えば次章で検証するドーンのように戦後オランダ社会学の復興に貢献した多くの社会学者が誕生した。なお、社会誌学の影響は1960年代まで継続していたという指摘もある。
- 7) オランダ社会学のなかでボンガーを社会学者とみなすか否かという議論が存在している。本文でも指摘したように、ボンガーはオランダ初の社会学教授就任や学会創設という功績を残している。しかし、スタインメッツと比較するとボンガーは社会学者としての業績は、「社会学史や社会哲学の講義に見出されるだけで、独自の社会的な研究は発表されていない」と評価されている (Doorn 1955: 203)。ドーンはボンガーを社会学者と見なしているが、彼がオランダ社会学に与えた影響はスタインメッツと比べれば少なかったと評している (Doorn 1955: 203)。ドーンはヘーリンクホイゼンのボンガー理解に対して、「社会学者ボンハー」を描き出すことによ
- って反批判を試みている (Van Doorn 1987: 137-39)。
- 8) ボンガーは、マルクス主義を単に自己の社会的営為の理論的支柱として位置づけていたのではなく、政治的実践の指針としていた。このことは、ナチス・ドイツに占領された1940年にオランダのゲシュタポに出頭を命ぜられたボンガーが自らの命を絶ったことから明らかである。
- 9) 本稿はボンガー議論を検討する際に、1916年に出版された英訳版を参照した。
- 10) ボンガーの書評に関する考察は、第三章において試みる。
- 11) 現代社会グループは、社会誌学の素朴な経験実証主義を批判するとともに、ドイツ社会学の影響を受けたボウマンを中心とした文化社会学に対する批判も行った。また、ドーンら若手研究者は社会誌学関係者を中心に運営がされていた ISONEVO (Instituut voor Sociaal Onderzoek van het Nederlandse Volk) に対しても批判を行った。ISONEVOは社会調査を専門にした機関で1940年に創設され、調査研究の重要な拠点を担っていた。なお、ISONEVOは1960年に現代社会学グループの自然的解消に伴い、SISWO (Stiching Interuniversitair Instituut voor Sociaal Wetenschappelijk Onderzoek) へと編成されていく。
- 12) 現代社会学グループが研究の拠点を置いたアムステルダム大学は、戦後まもなく「アメリカ研究センター」を設置し精力的な研究活動を展開した。
- 13) このように精力的な研究活動を行っていた現代社会学グループであるが、1960年代初頭までに、その組織的な活動を解消させていく。その理由のひとつとして、オランダ社会学会内の世代交代が終了したことが挙げられる。つまり、このことは、学会役員や学会誌の編集役員が、現代社会学グループ出身の若手研究者によって占められ、その運営形態自体も刷新されたことを意味している (Haan 1994: 106)。
- 14) 以下で展開する柱状化社会成立の歴史的経過に関する叙述は、田口晃 (1977)、Bryant

- (1982), Thurling (1979) を参照にした。
- 15) シュッツの現象学的社会学の影響のもと「哲学的社会学 (wijsgerige sociologie)」が登場し、ベーリング (R. F. Beerling) らがその中心を担った (Zijderveld 1966: 130)。
- 16) 例えば、この文化変容は、「プロヴォ (Provo)」と呼ばれる若者グループ、学生運動、徴兵制によって募集された一般軍人による兵士労働組合、「ドレ・ミーナ (Dolle Mina)」に代表される女性解放運動といった「反権威主義運動」に代表される (田口 1989: 237-241)。このような反権威主義運動は、1960年代を象徴する時代精神として全世界的な傾向であったが、オランダのそれは、先に述べた「柱」を横断した運動を組織したことに特徴を持っている (田口 1989: 244)。さらに、このような事態は、従来の社会規範が崩壊した「寛容社会 (permissive society)」と称されるに至った。
- 17) この時期にオランダでは様々な研究集団が形成されたことを指摘している (Haan 1996: 67)。
- 18) ハウツプロムは、ホーランドから『文明化の過程』を読むことを勧められた。その後ハウツプロムは、1954年に世界社会学大会に参加するためにアムステルダムを訪れたエリアスと接触を持ち、親交を深めることになった。ハウツプロムはドイツで行われたアメリカンゼミナールに参加し、そこに出席していたパーソンズにエリアスの『文明化の過程』を紹介した (Goudsblom 1977a: 86)。1950年代中頃は、パーソンズが『社会体系論』で展開された社会システム論にフロイトの精神分析を援用することを試みていた。なお、ハウツプロムはパーソンズとエリアスとの接点を「社会・文化・パーソナリティ」という議題設定に見出し、その検討を『ニヒリズムと文化』において試みた (Goudsblom, 1980: 64-74)。
- 19) 今日のエリアス研究から見れば、「第一巻」と「第二巻」をそれぞれ独立した著作として扱うことは、「個人の文明化過程と社会の文明化過程との関係が十分に理解されない」という批判を招くことになる。しかし、そのような「誤解」が生じてしまう理由として、『文明化の過程』という著作の不完全性にあるという指摘がある (Baumgart und Eichener 1991: 103)。
- 20) ボンガールの死後ヴィッセは、ボンガールの指摘を継承した『文明化の過程』に対する書評を発表する (Wisse, 1942)。戦後、ヴィッセは書評での議論を延長して『闘争する社会 (De strijdende maatschappij)』(1948) を発表した。このテキストは「闘争理論」の先鞭をつけるものであったが、発表当時のオランダ社会学界においてほとんど注目されなかった (Goudsblom 1977a: 61)。
- 21) オランダ語で最初に出版されたエリアスの著作は、エリアスの論文や著作からの抜粋を編集し1971年に『社会学と歴史学』として出版された。なお、『文明化の過程』のオランダ語版は1982年に出版された。
- 22) この雑誌は、エリアス社会学研究を主軸に据えていたが、エリアスやハウツプロムに対する批判論文 (例えば Boon, 1975) を掲載することによって、活発な議論を行っていた。
- 23) オランダ・エリアス学派は、1976年の結成以降、積極的な研究活動を国内だけでなく国際的にも行った。例えば、イギリスからダニング (Eric Dunning), メンネル (Stephen Mennell), ドイツからコルテ (Hermann Korte), グライツヒマン (Peter R. Gleichmann) を招き、共同研究を行った。また1977年には、エリアス生誕80周年を記念して、『Human Figurations: Essays for Norbert Elias』を発表した。この論文集は、オランダ・エリアス学派が試みた集団研究の成果であり、当時のエリアス研究の最先端を担っていた。
- 24) スワーンとウォウターズに関する詳細な議論は、拙稿 (1999) を参照していただきたい。なお、拙稿 (2000) においてエリアス社会学の到達点を踏まえ、構造 = 機能主義の批判を試みた。

邦語文献

市井吉興, 1999, 『脱形式化』としての文明化過程論
オランダ・エリアス学派による文明化過程
の新展開」『立命館産業社会論集』35 (3): 21-42.

- , 2000, 「文明化過程としての社会構成
ノルベルト・エリアスの社会学的想像力」『立命
館産業社会論集』35(4): 13-35.
- 田口晃, 1977, 「『多極共存型』デモクラシーの可能性
最近のヨーロッパ小国研究から」『思想』
632: 122-34.
- , 1989, 「文化変容と政治変動 1970年前
後のオランダ」山口定他編『戦後デモクラシー
の安定』岩波書店, 233-300.
- 長坂寿久, 2000, 『オランダモデル 制度疲労なき
成熟社会』日本経済新聞社.
- 外国語文献**
- Arnason, Johann, 1987, "Figurational sociology as a
Counter-Paradigm", *Theory, Culture &
Society*, 4 (2-3) : 429-56.
- Baumgart, Ralf und Volker Eichener, 1991, *Norbert
Elias zur Einführung*, Hamburg, JUNIUS.
- Becker, Henk. A. and Frans L. Leeuw, 1994,
"Contemporary Sociology in the Netherlands",
R. P. Mohan (ed.), *Handbook of contempo-
rary developments in world sociology*,
Westport, Greenwood Press, 153-84.
- Bonger, W. A., 1916, *Criminality and Economic
Conditions*, Boston, Little Brown and
Company.
- , 1940, "Boekbesprekingen", *Mensch en
Maatschappij*, 14: 283-4.
- Boon, Louis, 1975, "Goudsblom, Elias en de preten-
ties van een perspectief", *Amsterdams
Sociologisch Tijdschrift*, 2: 41-53.
- Bryant, Christopher, 1982, "Depillarisation in the
Netherlands", *British Journal of Sociology*, 32
(1) : 56-74.
- Daalder, Hans and Edward Shils eds., 1982,
*Universities, Politicians and Bureaucrats
Europe and the United States*, New York,
Cambridge University Press. (= 1990, 藤崎千
代子他訳『大学紛争の社会学 パリ五月革命
以降の欧米の大学はいかに変革されたか』現代
書館.)
- Doorn, J. A. A. van., 1956, "The Development of
Sociology and Social Research in The
Netherlands", *Mensch en Maatschappij*, 31:
189-229.
- , 1987, "Over Bonger: In gesprek met Van
Heerikhuizen" *Amsterdams Sociologisch
Tijdschrift*, 14: 127-42.
- Doorn, J. A. A. van. en C. J. Lammers, 1958,
"Sociologie en sociografie", *Sociologische Gids*,
5: 49-78.
- , 1959, *Moderne Sociologie: systematiek en
analyse*, Utrecht, Het Spectrum N. V.
- Elias, Norbert, 1969a, *Über den Prozeß der
Zivilisation 1*, Frankfurt am Main, Suhrkamp.
(= 1977, 赤井慧爾他訳『文明化の過程(上)』法
政大学出版局.)
- , 1969b, *Über den Prozeß der Zivilisation 2*,
Frankfurt am Main, Suhrkamp. (= 1978, 浜
田節夫他訳『文明化の過程(下)』法政大学出版
局.)
- Featherstone, Mike, 1987, "Norbert Elias and
Figurational Sociology Some Prefatory
Remarks", *Theory, Culture & Society*, 4 (2-3) :
197-211.
- Gleichman, Peter (eds.), 1977, *Human
Figurations: Essays for Norbert Elias*,
Amsterdams Sociologisch Tijdschrift.
- Goudsblom, Johan, 1977a, "Responses to Norbert
Elias's work in England, Germany, the
Netherlands and France", Peter Gleichman
(eds.), *Human Figurations: Essays for
Norbert Elias*, Amsterdams Sociologisch
Tijdschrift, 37-87.
- , 1977b, *Sociology of Balance: a critical
essay*, Oxford, Blackwell.
- , 1980, *Nihilism and culture*, Oxford,
Blackwell.
- , 1990, "Twenty Years of Figurational
Sociology in the Netherlands", W. H.
Kranendonk, *Society as Process A
Bibliography of Figurational Sociology in the
Netherlands (up to 1989)*, Publikatiereeks
Sociologisch Instituut Universiteit van

Figurational Sociology in the Netherlands: Its Contribution to Contemporary Dutch Sociology

Yoshifusa ICHII *

Abstract: The purpose of this article is to make a general survey of figurational sociology, which stems from Norbert Elias in the Netherlands, by reviewing the history of Dutch sociology. In the Netherlands, figurational sociology became very popular after 1969. Why was Elias's sociological viewpoint widely accepted in the Netherlands? During the 1960's, the Netherlands experienced drastic social change, including *depillarisation*. Though many sociologists began to analyse *depillarisation*, they were confronted with the limits of standard American sociology, which orientated Dutch sociology after 1945. Thus many young sociologists began to criticise standard American sociology, mainly the structural-functionalism, and to search for an alternative theory. Then they became interested in conflict theory, phenomenological sociology, and figurational sociology. After an invitation of Elias, Johan Goudsblom began to associate with the figurational sociology research group (est. 1976). Today, the figurational sociology research group, though they experienced a schism within the group, has been influential on contemporary Dutch sociology. Therefore, in this paper, three points have been selected for consideration:

1. S.R. Steinmetz and W.A. Bongers, who were the founders of early Dutch sociology.
2. The Modern Sociology Group, which J.A.A. Van Doorn established in 1953.
3. Figurational Sociology, which stems from Norbert Elias.

* Part-time Lecturer in Ritsumeikan University